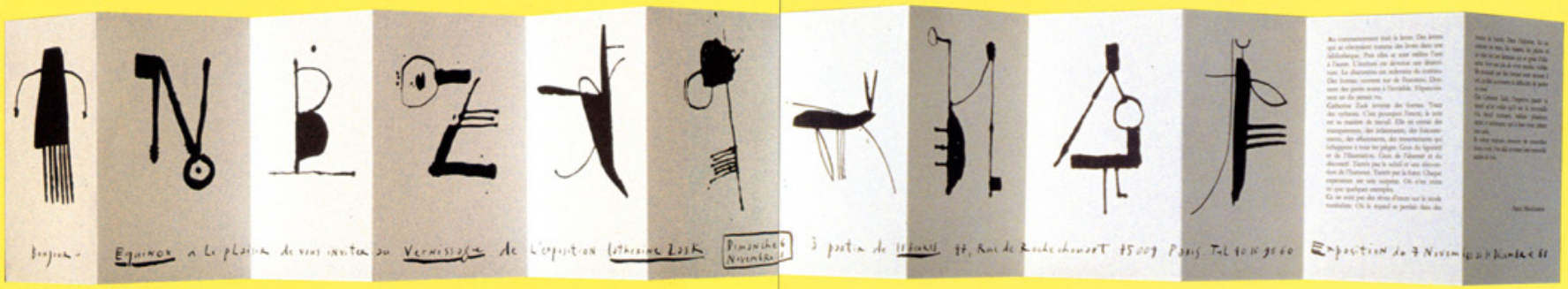

Invitation Card of Catherine Zask Exhibition/1988

Catherine Zask

カトリーヌ・ザスク

France

可読性と触感の熱いアンサンブル

フランスの文字デザインを語るとき、どうしても見逃せないのがカリグラフィ。線平描きの多いこの国のことだから、それを得意とする人を見つける方がたやすいくらいだが、どちらかというと、力まかせに書きなぐったような、それだけにインパクトのあるタイプの描き文字が目立つ中で、東洋の書道を思わせる極めて繊細な文字を描き出す人がいる。カトリーヌ・ザスクがその人。

彼女はいわゆるタイポグラフィの範疇には入らないだろうが、象形文字のようなモチーフもよく使う。たとえば、バスツールを特集した雑誌では微菌の簡略化した図を挿し絵にしたり、バロック・ダンス・カンパニーの「リス&ダンスリー」のマークには、バロックダンスのステップの記号を組み合わせたりと、中心になる、気になるものをとにかくたくさん描き、つきつめて行ったときに見えるものを取り上げる。これらはもちろん字ではない。が、写植帳の中にすでにあるものではなくて自分の手でその都度描き上げるカリグラフィとは、その瞬間にしかできあがらないものとして共通する。

なぜこのような文字に興味を抱いたのか。カトリーヌはESAG（高等グラフィック・アート・スクール）を出て一年間、ピエール・カッツ（Pierre Katz）のもとで働いた。彼はレイアウトより文字そのもののデザインをする人。

「毎日毎日、線と線の間とか均衡とかばかり考えていたんです。基礎を知る上ではとてもよかったけど、何だか外科手術してるみたい。ある日、大爆発したんです。私のやりたいことはこんなことじゃない！って」。

しかし何が何でも描き文字というのではないとも強調する。とくにポスターよりも編集物を手がけることの多い彼女は、文字を装飾としてだけ捉えているつもりはないという。

「ポスターは、はっと印象的に目に焼きつけばいいけど、ある程度の時間読み続けなければならない編集物は読みながら頭が痛くなるようでは困るでしょう。抽象的な字の美しさではなく、意味を紡ぎ出すものとして文字に興味があるんです。だから文章の内容のひどいものはやれません。グラフィックデザイナーの役割は通訳ですから、そのデザインセンスがどれほどすぐれていても、中身のないテキストを魔法の杖を振るようにグラフィックだけでよくすることは不可能です。私自身の主張を伝達するわけではありませんからね」。

だからカリグラフィのみの依頼を別にして（そういう仕事も結構ある）、グラフィック処理の場合、写植文字を主体にし、エッセンスのように手描きをあしらう手法を多用している。クラシックな読みやすさに触感を感じさせるような熱いアンサンブル。それができたときが一番うれしいとカトリーヌは言う。

〔桜井みどり〕

en Direct/Magazine/Franche-Comté University